

平成二十八年二月一日発行
漢字一〇九八号(毎月一回)日発行

京鹿子



2月号

鈴鹿呂仁

拾掬集 その五

神域の幣ひるがへり雪催

結託の雲は安土へ雪催

大冬木端くれの身に己が影

冬枯や上る下るの街の色

社家筋へ師走の路地の神さびる

マスクして妻の不精は板に付き



忘却の去年の翳ふむ裏参道
我が背に千の留目年迎ふ
あらたまの地球辛抱といふ軸を
初東風や明朝体の候文
あらたまの隈なき懐裡渡月橋
元朝の雲の遊びは天の息
人日や「お次の方」に見合ふ顔
なづな爪事と次第の小さき嘘

— 近 詠 —

鈴 鹿 仁

三日はや

三日はや流れの雲は嶺を越す

去年今年つばらつばらは胸の内

初鏡眉にいつぽん福白髪

— 追懐 — (その十八)

饒舌の男嫌はれ寒雀〔昭和五十三年作〕

寒雀何のかんのと健康体〔平成五年作〕



— 近 詠 —

和田 照海

崩れ築

鯨 飛んで 苦屋の 日暮ひとしほに
雁 渡し 羽づくろひして 駝鳥老ゆ
豪 川の 水音 集め 崩れ 築
絹 雲や 卑弥呼の くにの 妹背山
雲 水の 白き 踵や 冬 隣



松本 鷹根

冬を眩しむ

茶の花の自尊の白を解く下枝

枯るる野に影を伸ばして椅子二つ

落葉おちば片言の児が寄つて来る

沖に日矢鴨は入江の黙に浮く

ひたすらに冬を眩しむおとせ浜

近 詠



塩貝 朱千

花 柎

三方の瀬音重ねて楓朱に

花柎この世に生きて手を洗ふ

渡し跡の標あたらし文化の日

秋寒し魔女とゾンビに乗り合はす

霜月の眉太く描きレデイなり

英華採集

子規庵の数へきれざる鶏頭花

大 阪 本 郷 公 子

「鶏頭の十四五本もありぬべし」（子規）の本歌が先ず浮かぶ。現在の子規庵からタイムスリップして、晩年の子規に想いを馳せると鶏頭を数えられなくなつた子規の病床生活へと転換できる。中七の「数へきれざる」に子規への深い思いが滲む。

月の夜は草木と呼吸重ね合ふ

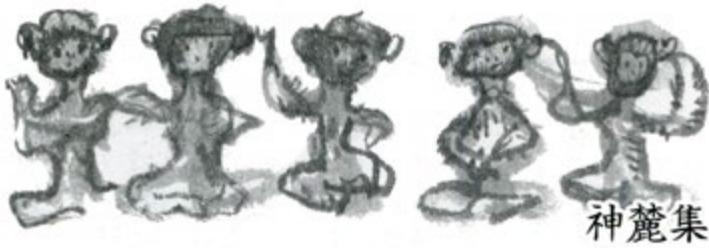
月ヶ瀬 中 峯 雍 子

煌々と照り輝く月を眺めて、人は様々なことを思いそしてその月を愛でる言葉を並べるが、作者は「月」の照らしているものは、人ではなく自然であるとしてその自然に自分を溶け込まそうとしている。中七の「呼吸重ね合ふ」に作者の心象が良く出ている。

鈍いろの雲間の夕日一葉忌

京 都 吉 岡 悦 女

薄幸な人生を送り若くして没した一葉の忌日は十一月二十三日。冬の荒涼とした寂寞感に苛まれた感傷は、一葉の著書「ゆく雲」をモチーフにして、雲間から覗く輝く夕日に一葉の切なき思いを重ねている。



枯木宿 藤岡 紫水

風呂吹や星より暗き山家の灯
樹の中に空を収めて山眠る
我が影に入りて動かぬ冬の蝶
寝そびれし夜はことさらに隙間風
日の当る方が正面枯木宿

晩年 沼田 巴字

濁る世に残すは何ぞ残る虫
晩年はまべて肯定日短か
一人ゆく一本道や枯野中
枯野中人間本来無一物
初日の出ひとひ一日のこころざし

檸檬 丸井 巴水

台風の目が消え解く和菓子箱
ささやきは輪切り檸檬の種の跡
欠け皿も売り物古物秋の暮
貧富なく磨き上げたるカシオペア
地に深くマンモスの骨蓮根掘る

野ざらし 伊藤 希眸

「眠り猫」いろは紅葉の彩に覚め
陽明門は日の本の魂秋澄めり
鼻啼く夜は小人の物語
蛇惑ひ断崖きざしの肌野ざらしに
悪知恵もついて子の手に赤かぶら

秋気澄む 北川 孝子

諦観のかくも明るき枯葉どき
息吸ふは吐くよりさびし枯葉山
冬めきて稜線青く重ね合ひ
力まずに生きるよと決めて枯葉踏む
追憶は追うほど深し秋気澄む

草紅葉 直江 裕子

淋しさのきはみ紅葉になりすます
もうすぐはまださきのこと大花野
籠もり沼に十六夜の月隠しおく
叱られつ子のかたちでいつぼん枯れ残る
情とはこんな水草紅葉草紅葉



京鹿子集

鈴鹿呂仁選

子規庵の数へきれざる鶏頭花

大 阪 本郷 公子

歩くたび骨きしむ音霜日和

桃熟るる黒光りして箱階段

秋の逝く父の声なる観音経

月の夜は草木と呼吸重ね合ふ

月ヶ瀬 中峯 雍子

秋深む積まれし巨石濃き古代

秋深し刻字うするるしるへ石

秋の山百穂の波のしるじると

鈍いろの雲間の夕日一葉忌

京 都 吉岡 悦女

結末はドラマの如く木の実降る

芋の露光こぼさずしづかなり

母の忌の輪切りの大根あめいろに

台風禍いのちの絆深さ知る

外見で分らぬままに西瓜買ふ

秋麗や己の心にリトマス紙

無花果を競つて挽ぎし裏の庭

秋深し日毎にオレンジふえる森

庭めぐり葉によき葉秋の風

オハイオのブルーの秋空友の顔

舞ながら目前で一枚紅葉散り

アリゾナ 伊吹 之博

オハイオ 水谷 直子

雪囲由緒正しき村屋敷

札 幌 野村 鞆枝

近景に棟上げの家天高し

苦瓜の種こぼれたり二度の瓜
虫の音の闇に染み入る人の影

秋刀魚焼く隣家と同じ匂ひたて

行き合ひの黄落靴を染めてゆく

習志野 上野 紫泉

遠峯の白く粧ひ今朝の冬

神杉や神も移ろふ鴟日和

秋祭り屋台を覗く人の波

夕紅葉日矢揺らしめて風去りぬ

酒 田 藤波 松山

初秋刀魚百年前もこの味や

朝霧や逢ひたき人の忌曰くる

単純に何か落着く菊浸し

焼香の指に残り香萩の風

船 橋 元橋 孝之

秋暮るゝパンに納豆上げてみる

秋雲を綿菓子といふ日和の子

隣家より散り落ちる柿葉の彩

相性はわおんわおんと鐘の秋

洪 川 東 秋茄子

風花の向う富士の歴史針葉樹

呪文吐くからすとびさる暮の秋

雲海を眼下に富士の高さ知る

そぞろ寒膜をかぶりし目玉焼

金子 正道

富士五合目に中国の人秋旅

身に入むや浸水の跡残す壁

ポストまで月影さやか下駄の音

お任せでロト6買ふ秋うらら

さいたま 神田 惣介

皇居前ビルの窓々秋思かな

どこまでがほんとはなし濁り酒

父母の言憶ひて灯す秋の燭

秋深し米寿の祝ひにある疲れ

東 京 野中 圭子

名月や芝生に胡座コンサート

満月の路地いつばいや立ち疎む

川沿ひの家十軒に十月の月

額写真真仏に捧ぐ柿林檎

秋灯し森の香秘むる利休箸

杜鵑草公民館の賑はひて

千 葉 布川 孝子

短日や帰宅時刻を子に問はれ

裏街道自己主張する破芭蕉

秋うらら足指運動グー・チヨキ・パー

池を背に蒲の穂絮の舞ふ小径

丹羽 武正

澄む空を歩く靴音スカイツリー

時が来て前座つとめる初紅葉

婚祝ふ鳳凰の舞秋澄めり

空模様確かめ急ぎ障子貼る

松 戸 岡山 敦子